
福井市自然史博物館

第6回 福井の自然しらべ発表会

(研究発表会) 要旨集

会期 2026年3月21日(土) 13時~17時

会場 福井市自然史博物館 3階レクチャーホール



福井市自然史博物館

-2026-

プログラム

12:20 受付

13:00 開会挨拶

第1部 13:10～14:30

13:10 リラックス効果のあるスズムシチャイムを作る研究

檜山のあ（福井県立高志中学校）

13:25 ホタル観察日記 ～ヘイケボタル～2025夏 ～自然の中で生きるということ～

大鐘美冠（福井大学教育学部附属義務教育学校）

13:40 外来種アカハネオンブバッタの個体数と行動範囲について

～マーキング調査で分かったこと～

佐藤星奈（福井市立湊小学校6年）

13:55 福井市堂島町におけるホシアシブトハバチ *Agenocimbex jucunda* の採集、飼育記録

本道一樹（福井県立藤島高校）

14:10 福井市足羽山におけるカミキリムシ科甲虫の分布様式：植生依存性の検討

立松拓樹（北陸学園北陸高校）

14:25 笏谷石（笏谷凝灰岩）と共に旅をする埋もれた化石

安野敏勝（福井市自然史博物館協力員）

休憩 14:45～14:55

第2部 14:55～16:30

14:55 福井県におけるソウシチョウの 侵入・定着プロセス

出口翔大*（福井市自然史博物館）・松村俊幸（日本野鳥の会福井県）

三原学・吉田一郎・関 優（日本鳥類標識協会）・佐藤文男・澤祐介（山階鳥類研究所）

15:10 福井県で90年ぶり？ 足羽山で見つかった陸産貝類「ムシオイガイ」

有馬達也（福井市自然史博物館）

15:25 博物館ボランティアと協働で取り組んだ花の拡大模型作り

柴田あかり（福井市自然史博物館）

15:40 福井県で採集された明治時代の「ガッサンチドリ」の標本が東京都立大学 牧野標本館で見つかる

榎本博之（福井市自然史博物館友の会）

15:55 福井市足羽山七ツ尾口坑道に生息する真洞窟性大型トビムシの正体に迫る

葛西弘*・角田智詞（福井県立大学生物資源学部）・藤野勇馬（中池見ねっと）・梅村信哉（福井市自然史博物館）

16:10 福井県内で近年確認された外来昆虫・暖地性昆虫の分布状況 ～福井市自然史博物館で実施した市民参加型調査「ふくいむしむし大調査－昆虫の分布調査 in 福井 2025」の結果を踏まえて～

梅村信哉（福井市自然史博物館）

17:00 閉会

13:10～

リラックス効果のあるスズムシチャイムを作る研究

檜山のあ（福井県立高志中学校）

私は小学生の時からスズムシチャイムを作る研究というテーマで三年間継続して研究をしてきた。スズムシの鳴き声にはリラックス効果があり、家でスズムシを飼うようになってから、母の不眠症が改善した。しかし、スズムシは夏から秋にかけてしか鳴かないので、他の季節でもスズムシの鳴き声が聴けたらいいなと思い研究を始めた。最初はドアに取り付けるウインドチャイムという形で作成したが、ドアを開け閉めした時にしか音が鳴らなかったり、音色やリズムがあまりスズムシに似ていなかったりという欠点があったため、去年は電動化、プログラミングして、より本物のスズムシの鳴き声に近いものにした。さらに、今年は福井の伝統工芸の越前箆筒と組み合わせて見た目も美しく、音色もさらによいスズムシチャイムに発展させた。



図1：最初に作成したスズムシチャイム



図2：現在のスズムシチャイム

13:25～

ホタル観察日記 ～ヘイケボタル～2025夏 ～自然の中で生きるということ～

大鐘美冠（福井大学教育学部附属義務教育学校）

2024年の6月から大野市上丁地区でヘイケボタルの観察をしている。この地区は2024年の秋から5年の計画で区画整理が行われることになり、生息環境を守ろうとする地域の方と一緒に田んぼにいるヘイケボタルを近くのビオトープに移す活動を始め、研究をしている。2024年はヘイケボタルを捕獲して飼育し、ホタルの成虫と幼虫の生態について調べた。そして産卵、孵化した幼虫約1,000匹をビオトープへ放流した。2025年は放流した幼虫が成虫になるまでの様子を観察し、飛翔を楽しみに研究を続けたが、結果は私が期待していたようにはいかなかった。これからの研究でホタルと人間が共生できる環境についても考えていきたい。



図1：大野市上丁のビオトープ



図2：飼育箱の中で孵化した幼虫

13:40～

外来種アカハネオンプバッタの個体数と行動範囲について

～マーキング調査で分かったこと～

佐藤星奈（福井市立湊小学校 6 年）

福井県内におけるアカハネオンプバッタの初記録から約 1 年後の 2025 年 9 月、丹鳥公園で校外学習をした湊小学校 1 年生が、外来種のアカハネオンプバッタを見つけた。個体数や行動範囲を知るため、2025 年 9 月 23 日から 2026 年 1 月 18 日に、アカハネオンプバッタと在来種のオンプバッタのマーキング調査を行った。調査により、アカハネオンプバッタ 280 匹、在来種 51 匹が見つかった。行動範囲の最長はアカハネオンプバッタ約 105m、在来種約 60m だった。在来種と比較し、アカハネオンプバッタは個体数が約 5.4 倍と多く、長期間成虫が見られ、後翅が大きいので遠くまで跳び、広く移動できると分かった。また、外来種と在来種の交尾が 5 件見つかり、今後も繁殖干渉が発生することで、個体数の少ない在来種の減少が起こるのではないかと考える。



図 1：マーキングの様子
調査では外来種も在来種も、
番号を後翅や体を書いて放した。
(撮影：2025 年 9 月 23 日)



図 2：丹鳥公園（遊具側）の様子
(撮影：2025 年 11 月 16 日)

13:55～

福井市堂島町におけるホシアシブトハバチ *Agenocimbex jucunda* の採集、飼育記録

本道一樹（福井県立藤島高校）

発表者は2024年5月、福井市堂島町の自宅の庭のエノキにてホシアシブトハバチの幼虫を多数発見した。発見者が初見の昆虫であったため、虫かご内に土とエノキと共に本種の幼虫を入れ、飼育を行って成虫に羽化させたいうで同定を行った。この記録を福井市自然史博物館梅村信哉学芸員に報告したところ、福井市初の記録であった。今回の発表では、ホシアシブトハバチの飼育記録について報告する。



図1：ホシアシブトハバチ成虫



図2：ホシアシブトハバチ幼虫

福井市足羽山におけるカミキリムシ科甲虫の分布様式：植生依存性の検討

立松拓樹（北陸学園北陸高校）

福井市足羽山において、2022年から2024年の5月～10月にかけて、灯火採集法とルートセンサス法によりカミキリムシ相を調査した。その結果、2科5亜科28種722個体を確認した。種構成は、コナラ等を食樹とするミヤマカミキリ等の広葉樹食種や、枯木依存種が種数・個体数ともに多くを占め、足羽山の二次林的な環境が反映されていた。植生による群集構造の解析では、コナラ林を中心とする区画で種数・個体数が最も多く、スギ・ヒノキ林が主体の区画では著しく少なかった。また、スタジイ林やクズ繁茂地など植生特異的な群集も確認された。以上より、本地域のカミキリムシ類の分布様式は、植物の多様性や森林構造に強く依存していることが示唆された。



図1：調査ルート

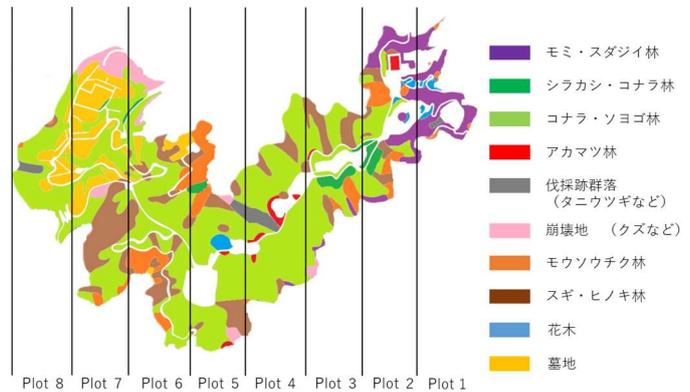


図2：足羽山の植生図

笏谷石（笏谷凝灰岩）と共に旅をする埋もれた化石

安野敏勝（福井市自然史博物館協力員）

笏谷石（笏谷凝灰岩）は、「福井県の石」にも指定されている岩石で、古くは北前船による交易を通して北海道から島根県に及ぶ広域で“石材”として活用されている岩石である。笏谷石は、現在の日本海が形成される直前の火山活動の噴出物（主体は火山灰や火山礫で、活動は約 1800 万年前）から出来ている。発表者は、笏谷石に肉眼で確認できるサイズの海生の生痕化石（ブンブクウニ類による移動棲管跡）などが産出したことを報告した。このことから、足羽山から切り出された笏谷石にも化石が含まれている可能性は高いことが推測される。

本報告では、①足羽山、②福井県庁、③県庁付近の神社などの石材中に見られたものの一部を紹介する（図 1～3 はその一部）。

上述のように笏谷石は日本の広域で利用されている。普通、旅先で見られる笏谷石を“文化財的・美術的な視点”で鑑賞することが多いのではないかと推測している。今後はそれに加えて、“地質・古生物学的な視点”でも鑑賞する観点を持ち合わせると、それまでとは異なった思い出を得られるのではないだろうか。発表者はそうなることを願っている一人である。



図 1：足羽山の石材



図 2：福井県庁内の石材

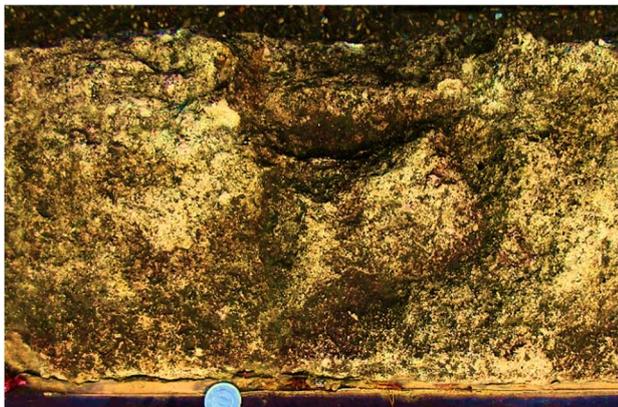


図 3-A：県庁周辺の公園の石材

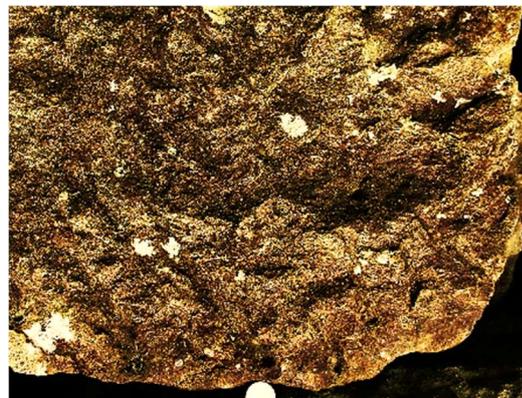


図 3-B：県庁周辺の神社の石材

14:55～

福井県におけるソウシチョウの 侵入・定着プロセス

出口翔大* (福井市自然史博物館)・松村俊幸 (日本野鳥の会福井県)
三原学・吉田一朗・関 優 (日本鳥類標識協会)・佐藤文男・澤祐介(山階鳥類研究所)

外来生物対策において分布拡大の過程や傾向を把握することが、重要である。

本研究では、特定外来生物に指定されているソウシチョウの侵入・定着プロセスを福井県における観察および標識記録から検証した。

福井県では 2006 年秋季 (10 月) に初めて記録され (成鳥 3 羽の標識)、その後、2013 年秋季 (11 月) の雄幼鳥が標識され、しばらくは県内での記録はなかったが、観察では 2016 年から毎年秋季に記録され、2020 年からは秋季の記録に加え繁殖期 (5 月下旬～8 月) の記録が増加した。標識では 2017 年から 2021 年まではほぼ毎年秋季に記録されたが、2022 年繁殖期 (5 月) と 2024 年 7 にはそれぞれ一部に抱卵斑の認められる 5 羽の雌雄成鳥と周辺で巣立ったと考えられる幼鳥 2 羽が記録された。

これらのことから、福井県における本種の本格的な侵入は 2017 年頃から起こったと推定される。越冬期における観察・標識記録が最初に得られ、その後、繁殖期にも観察・標識されるようになった。他地域でも同様の傾向を示すことから、越冬期に行動範囲を拡大し、後に繁殖で定着する行動が、本種の分布拡大のプロセスであると考えられる。



図 1：2020 年 12 月に足羽山で観察されたソウシチョウ

15:10～

福井県で90年ぶり？ 足羽山で見つかった陸産貝類「ムシオイガイ」

有馬達也（福井市自然史博物館）

福井市自然史博物館のある足羽山では、これまで39種の陸産貝類（広義のカタツムリ）の生息が報告されている。この中には、40年以上前の調査を最後に生息記録がない種も多い。2025年6月、このうちの1種であるハリマムシオイと思しき陸産貝類が足羽山の招魂社参道に多数生息しているのを発見した。また、2021～2022年にも類似の種が足羽山で発見されており、こちらはミヤコムシオイと同定されている。しかし調査の結果、これらはハリマムシオイでもミヤコムシオイでもなく、福井県では採集記録が1件あるのみのムシオイガイ *Chamalycaeus nipponensis* である可能性が高いことが判明した。もしムシオイガイであれば、足羽山では初記録であり、福井県でも90年ぶりの記録である。

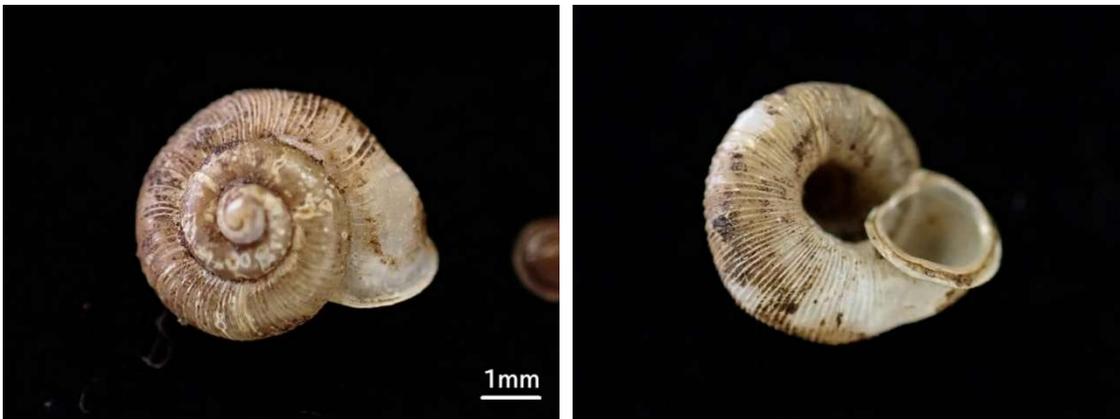


図1：足羽山で採集された、ムシオイガイと思われる陸産貝類。左：上面，右：下面

15:25～

博物館ボランティアと協働で取り組んだ花の拡大模型作り

柴田あかり（福井市自然史博物館）

被子植物にとっての生殖器官である花には多種多様な形や色が見られる。これは花粉を効率よく受け渡し、確実に子孫を残すために適応進化を遂げてきた結果である。一般市民の方にも花の戦略をわかりやすく伝えるとともに、博物館のボランティア活動を活性化させることを目的として、ボランティアメンバーと共に花の観察と拡大模型の制作、模型の展示を行った。今回は身近な4種（カタクリ、タンポポ、イネ、ツユクサ）を選定し、樹脂粘土を使って制作した。2026年春の特別展では制作した拡大模型を展示している。参加メンバーからは、「花を微細に観察する必要性を感じた」、「みなで工夫して模型を作り上げる作業が楽しかった」などの意見が得られたことから、花の拡大模型作りがボランティア活動の活性化にも繋がったといえる。



図1：カタクリの花の拡大模型

15:40～

福井県で採集された明治時代の「ガッサンチドリ」の標本が 東京都立大学 牧野標本館で見つかる

榎本博之（福井市自然史博物館友の会）

発表者らは、2022年に県内においてガッサンチドリ (*Platanthera takedae* Makino subsp. *uzenensis* (Ohwi) K.Inoue)を初記録したと報告した。しかし、100年以上前の明治40年(1907年)に亀山幸太氏が白山で採集したガッサンチドリの標本を牧野標本館で確認した。この標本は、ランの研究で有名な井上健博士が1978年にミヤマチドリ「ガッサンチドリ型」と同定した標本であった。この標本を私が確認した時に、我々が初めて見つけたと思っていた植物を100年以上前の先人が白山に登山して、変わった植物と認識し採集して、牧野富太郎博士に託したと思うと、驚きと感慨深さ、亀山幸太氏に対する尊敬と親しみを感じた。併せて、発表者らによる先述の報告を訂正するとともに、県内や近隣県の標本を調査しなおす必要性を感じた。そこで、福井市自然史博物館の標本も再確認したが、ガッサンチドリの標本は見つからなかった。

ここ福井市自然史博物館にある標本も大変重要な福井県の宝だと考える。この標本類を生かして、市民参加型の学びの場を提供できると思われる。牧野富太郎博士の学びのあり方や牧野標本館の活動は、現在の私たち福井市自然史博物館友の会の活動にも大いに参考になることだと感じた。



図1：亀山幸太氏が明治40年(1907年)7月に白山で採集したガッサンチドリの標本(井上健博士が1978年にミヤマチドリ「ガッサンチドリ型」と同定した。ガッサンチドリの花A、距がこん棒状B)(東京都立大学牧野標本館所蔵)

15:55～

福井市足羽山七ツ尾口坑道に生息する真洞窟性大型トビムシの正体に迫る

葛西弘*・角田智詞（福井県立大学生物資源学部）

藤野勇馬（中池見ねっと）・梅村信哉（福井市自然史博物館）

トビムシといえば、林床で跳ねる小さな虫というイメージが強い。しかし、光が届かない洞窟や坑道内においても数多く存在している。そして、その閉鎖的な環境とトビムシの移動分散能力の低さに起因して、洞内には固有種も多い。足羽山にある七ツ尾口坑道では、洞窟性トビムシの中でも一際大きく目立つハクバドウホラズミトビムシが記録されている。名前のおり大野市にある白馬洞から記載された種であるが、一つの疑念がある。それは、これまで数多くの固有種が発見・記載されてきた七ツ尾口坑道に生息するホラズミトビムシが、果たして本当に既知種なのかという点である。下の写真のおり、巨視的な形態では両者を区別するのは困難である。そこで本発表では、微視的形態を用いた比較検証によって、両者は別種となりうるのか、その検証を行った結果を紹介する。



図1：七ツ尾口産ホラズミトビムシ



図2：白馬洞産ホラズミトビムシ

16:10～

福井県内で近年確認された外来昆虫・暖地性昆虫の分布状況 ～福井市自然史博物館で実施した市民参加型調査「ふくいむしむし大調査－昆虫の分布調査 in 福井 2025」の結果を踏まえて～

梅村信哉（福井市自然史博物館）

2025年8月5日から12月15日に、アカハネオンブバッタ、ムネアカハラビロカマキリ、シタベニハゴロモ、キマダラカメムシ、ヒラズゲンセイ、クビアカツヤカミキリ、ツヤハダゴマダラカミキリ、アカボシゴマダラの8種の昆虫を対象に、福井県内での分布状況を調べるための市民参加型調査を実施した。本調査では、対象種の名前、場所、日時、発見者氏名、氏名等の情報と対象種の写真を、電子メールまたは専用の投稿用フォームで報告してもらった。その結果、121件の報告があり、アカハネオンブバッタの県内での急速な分布拡大が明らかになったほか、キマダラカメムシ、ヒラズゲンセイ、アカボシゴマダラではこれまでに生息が確認されていなかった市町での目撃情報が得られた。この市民参加型調査を踏まえて、2025年12月現在での対象種の県内における分布確認状況について報告する。



図1：アカハネオンブバッタ

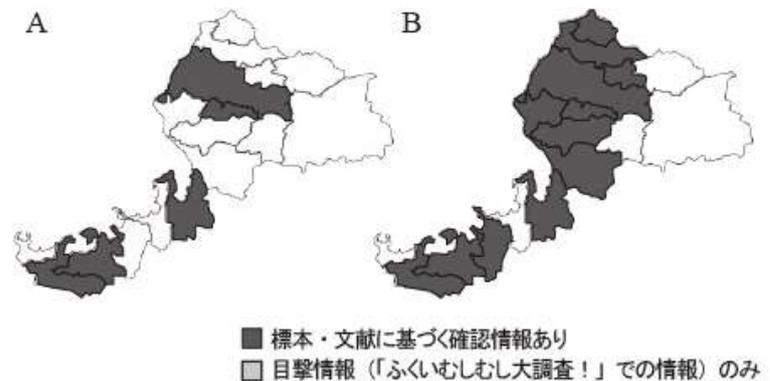


図2：アカハネオンブバッタの分布確認地点の比較

A：2024年，B：2025年